論文の内容の要旨

論文題目　携帯メール言語研究―日本語と韓国語の対照を通じて―

氏名　新井保裕

20 世紀末にメディアの発達によって登場したインターネットは，新しいコミュニケーション手段を生み出しただけでなく，人間のコミュニケーションにおいて最も重要な役割を担い根幹を成していると言える言語にも影響を及ぼした．本研究では，その中でも特に言語の変容が注目され，多様な表記が用いられている携帯メールを取り上げ，インターネットを媒介した新たな文字言語を分析する．文字言語というのは本来，音声言語に比べて規範的なものであるが，携帯メールの登場により，以前よりも脱規範的な表記が顕在化し，そこにこれまで見えてきづらかった，「文字の使われ方」という文字の情報行動，言語行動が見える．携帯メールの脱規範的な表記は世界共通の言語現象であることが示唆されているが，これまで深層的な理論研究は行われていない．アルファベットという音素文字が中心的に用いられる欧米言語では，文字は音声の二次的な存在としての機能が相対的に大きいため，「文字の使われ方」に焦点を当てられることが少なかったためと思われる．

そこで本論文では携帯メールのテクスト上に現れる文字言語を「携帯メール言語」と称し，「文字の使われ方」に焦点を当てて，携帯メールが重要なコミュニケーション・ツールである日本語と韓国語を対象に分析していく．携帯メール言語という事象の記述・観察に留まるのではなく，量的・質的な調査・分析により携帯メール言語利用のメカニズムをモデル化する．日韓対照研究を通じて「人はなぜ携帯メールや携帯メール言語の脱規範的な表記という文字言語を選択・使用するのか」，その解の共通性と相違性を明らかにすることで，携帯メール言語の普遍性と多様性を知る契機とする．そして携帯メール言語に代表される，インターネットを媒介した新たな文字言語を，欧米言語学とは異なる観点から分析することで，これまで見えてこなかった文字言語の

側面について考える．

序章ではまず日韓携帯メール言語の先行研究を概観し，研究方法を提示した．これまでの先行研究は事象の記述・観察に留まっていること，対照研究が少なく，携帯メール言語の共通性と相違性が明らかでないことを指摘し，本研究では，既存の研究と異なり，実際に使用された携帯メールの収集・分析を行い，様々な観点から携帯メール言語の普遍性と多様性を明らかにする契機とすることを述べた．また携帯メール言語を一過性のサブカルチャーと捉え，研究の対象から退けるのは避けるべきであるとして，携帯メール言語研究の意義についても言及した．

２章と３章では携帯メール言語の静態研究を行った．前半の２章では携帯メール言語の特徴を，言語学，メディア論，技術論の三観点から見た．まず言語学的分析を通じて，携帯メール言語の特徴は＜書かれた話しことば＋脱規範的な表記＞であることを示した．さらにメディア論の観点から，携帯メールは音声コミュニケーションに近く，時間的な余裕があるため，脱規範的な表記が用いられ易いことを見た．最後にそうした脱規範的な表記がどのように実現されるのか，技術論の観点から分析し，脱規範的な表記が生成され，「文字遊び」が行われる環境であることを確認した．

３章では携帯メール言語に特徴的な脱規範的表記を，形式，機能，実現方法の三側面から見た．形式面の分析を通じて，脱規範的表記は日韓で用いられる文字とその体系，表記法の違いが反映され異なる様相を見せることを示した．機能面から見ると，脱規範的表記は日韓共に，言語外の要因も含めて音声言語として実現可能な「意味」と，音声言語として実現するだけでは不十分あるいは不可能な「効果」の二つの機能を備えることがわかった．「効果」には経済性効果，表現性効果が含まれる．ただ韓国語のハングルの場合，日本語のひらがな，カタカナ，漢字と異なり，音素文字の性質を備えるため，経済性効果が現れ易くなっており，ここにも日韓で用いられる文字の違いが反映される．脱規範的表記の実現方法は，日韓で類似している．

また類型別脱規範的表記数の日韓対照を行うことで，日本語には日本語母語話者のヴィジュアル・コミュニケーションへの志向性，韓国語には韓国語母語話者のハングル中心的利用傾向が見え，脱規範的表記には「文字の使われ方」という文字の選択的使用傾向が反映されることがわかった．この「文字の使われ方」はこれまでの文字論の先行研究で扱われることのなかった分野であり，「文字活用論」として文字論の下で研究していくべき課題であることを示した．

４章以降では，携帯メール言語という事象の観察・記述に留まらず，動態研究を行った．まず４章では脱規範的表記に現れる言語行動研究の前段階として，携帯メールの情報行動を分析した．携帯電話における通話とメールの行為選択に焦点を当てて日韓の対照研究を行い，日韓共に，連絡対象の待遇度，親疎度，連絡重要度が行為選択に影響を与え，それらが低くなるほど相対的にメール志向が強くなることを明らかにした．メールは各種要因に基づき規則的に利用され，そこには利用者の待遇意識が潜在していることがわかる．連絡メディアの使い分けによる情報行動の待遇法と言うことができ，言語媒体選択という待遇法の新形態の登場を示唆した．一方で，日本

では場面心理負担度,韓国では情報提供量が行為選択に大きな影響を与えるなどの違いも現れた.

５章と６章では書き換えテストで得られた携帯メール・データを対象に，主に携帯メール言語の脱規範的表記比率という計量化基準を用いて,脱規範的表記がどのように用いられているのかという脱規範的表記の言語行動を分析した.まず５章では送受信者の性別に焦点を当て全体的結果を分析し，①韓国語の方が日本語よりも脱規範的表記が定着，②日韓共に女性中心の利用，③女性のコミュニケーション・スタイルへの男性のシフト，④表現性効果の表し方の日韓差，性別差（韓国語のみ）という四点を明らかにした．さらに場面別の分析を行い，それらが場面に普遍的なものであるかどうかを確認した．そして場面別結果の比較を通じて，⑤日韓共に高心理負担度場面では規範通りに表記する傾向，⑥韓国語の謝罪場面では，男性による，女性のコミュニケーション・スタイルへのシフトが起こること，⑦韓国語のみ表現性効果の表し方には場面差があることを明らかにした.

さらに６章では全体的結果と同じ傾向を示した謝罪場面を対象として，受信者年齢，受信者親疎，場面連絡重要度という三変数に焦点を当て日韓対照分析した．その結果，日韓共に待遇度が低くなる，または親疎度が高くなると相対的に脱規範的表記が用いられ易い．脱規範的表記は決して無秩序に用いられるのではなく，先の情報行動と同様に垂直的・水平的という二元の人間関係に基づいて規則的に量的使い分けが成されており，既存の待遇法の応用形であると言える．連絡重要度別に分析を行うと，日本語では相関が見られなかったのに対して，韓国語では重要度の高い場面で脱規範的表記が多く用いられることがわかる.脱規範的表記は実質的な意味が弱くとも，そのコミュニケーション機能が共有されると新たに平衡作用が発生し，円滑なコミュニケーションが行われる可能性や日常の対面コミュニケーションの影響も指摘される.日本では装飾的表現性効果が強いのに対して，韓国では実践的表現性効果が強いと言える.

７章では，４～６章の分析結果をポライトネス理論の観点から分析した．そして情報行動と言語行動には異なるベクトルが働いているが，P 要因と D 要因を統合させたハンバーガー・モデルにより統一的に説明できることが示唆された.水平的人間関係と垂直的人間関係は相互浸透を起こしており，二元ではなく 1.5 元の人間関係によって携帯メール言語は利用される．もともと携帯メールは，通話を用いた場合に配慮が過剰あるいは過小になってしまう状況で，適正な配慮を行うために選択されるようになった.携帯メールには通話と比べてコミュニケーションの限界があるが，脱規範的表記という視覚的手段を用いて，コミュニケーションを補強する．その補強は通話の役割を完全に代替するものではないが,一方で通話が持たない機能を備えるという独自の発展を見せる．さらに脱規範的表記の量的な使い分けによって，状況に相応しいコミュニケーションを実現している．以上のように，携帯電話という「機械」を通じて複雑化されたメカニズムの中でも，携帯メール・携帯メール言語の脱規範的表記は，言語の主たる目的である「人」のコミュニケーションのために一貫して体系的に用いられている.これらは日韓に共通する現象であり，対人配慮行動の総合体であると言える．一方で，日韓の相違点も多く存在するが，携帯メール言語にはその国の言語で用いられる文字とその体系，表記法,「文字活用」や日常のコミュニケーション・スタイル，脱規範的表記の定着度が反映され，携帯メール言語利用メカニズムの

多様性を生み出している．日本と韓国において，「人はなぜ携帯メール・携帯メール言語の脱規範的表記を選択・使用するのか」，その一般性と相違性に対する，本論文が示す答えは以上である．

８章では本研究が，計量言語学への貢献，対人行動の新分野開拓，文字論への貢献，日韓対照言語学の新領域開拓，ミスコミュニケーションの回避という点で意義が認められることを確認し，課題・展望について述べた．脱規範的な表記は，携帯メール言語だけでなく他の文字言語にも見られる言語現象であり，携帯メール言語研究は一つの言語現象の分析だけに留まるものではない．携帯メール言語研究の更なる発展は，言語とコミュニケーション，そして文字の関係を明らかにすることにつながっていく．